

〔平成26年度四街道市民大学講座（専門課程）の報告〕

## 平成26年度四街道市民大学講座（専門課程）の報告

企画担当 教授 鈴木 邦 武

### 1. 実施概要

平成26年度の四街道市民大学講座（専門課程）は、「文化の成り立ち－外来文化の影響」という総合テーマで、愛国学園大学人間文化学部の人間文化コース、言語文化分野の4人の教員が担当して実施した。

この講座の呼びかけとしては、「ある文化は他のさまざまな文化の影響をうけながら成立しています。本講座では、愛国学園大学人間文化学部人間文化学科の言語文化分野関係の教員がそれぞれの専攻分野の立場から「外来文化の影響」という点に視点をあてて「文化の成り立ち」についての考察の素材を提供して皆さんとともに考えてみたいと思います。」とし、1回目と2回目は伏見親子教授が「英語の成り立ち」、3回目と4回目は蘇位静講師が「日本語を母語としない児童・生徒と学校文化」、5回目と6回目は高橋美和教授が「東南アジア文化へのインド文明の影響」「カンボジア社会に定着した外来文化」、7回目と8回目は鈴木邦武教授が「フランシスコ・ザビエルの来日とキリスト教の伝播」「日本をヨーロッパに紹介したオランダ商館付の2人の医師、ケンペルとシーボルトについて」という題目で、それぞれの研究成果に基づき講義を行い、文化の成り立ちについて考察する機会をもった。

市民大学の広報は平成26年7月号の四街道市「市政だより」及び本学ホームページでおこなわれ、募集期間は7月15日から7月31日までの期間で、応募者は男性21名、女性17名、計38名であった。

開講式は9月20日に、閉講式は平成27年3月14日に四街道市教育委員会及び本学関係者が出席して実施された。開講式の際には、それぞれの講座担当者から講義の内容の紹介が行われた。

市民大学講座は平成26年9月20日から平成27年3月14日まで全8回次に示すスケジュールで実施されたが、講座への出席状況は極めて良く、80パーセントの受講者に修了証が発行された。

## 2. スケジュール－期日、講座内容、担当者

区分	期 日	内 容	
開講式	9月20日(土)	9:30～	
第1回	9月20日(土)	英語の成り立ち(1)－ヨーロッパの北(ゲルマン)と南(ラテン)	伏見 親子
第2回	10月11日(土)	英語の成り立ち(2)－借りる、造りかえる、誤解する…	伏見 親子
第3回	11月1日(土)	日本語を母語としない児童・生徒と学校文化(1)	蘇 位静
第4回	12月13日(土)	日本語を母語としない児童・生徒と学校文化(2)	蘇 位静
第5回	1月17日(土)	東南アジア文化へのインド文明の影響	高橋 美和
第6回	1月31日(土)	カンボジア社会に定着した外来文化	高橋 美和
第7回	3月7日(土)	フランシスコ・ザビエルの来日とキリスト教の伝播	鈴木 邦武
第8回	3月14日(土)	オランダ商館付の2人の医師、ケンペルとシーボルトについて	鈴木 邦武
閉講式	3月14日(土)	11:45～	

講義時間 10時～11時30分

### 3. 各講座の内容

第1回、第2回：伏見 親子教授担当

英語の成り立ち

言葉の成り立ちには大きく分けて他国語からの借用 (borrowing) によるものと、いくつかの型に従った語形成 (word formation) によるものがある。それらを各回において講義した。

第1回 平成26年9月20日(土)

「英語の成り立ち(1) 歴史的視点から：ヨーロッパの北(ゲルマン)と南(ラテン)」

第1回目は、借用である。

借用語には、外来語をそのまま借用する場合と、既存の自国語で外来語の意味を表そうとする場合—借用翻訳 (loan translation) 乃至は意味借用 (semantic borrowing)—とがある。

英国はヨーロッパ大陸の西にある島国で、主に大陸からの侵略による民衆の移動と共にその言語も導入され、今日の英語が形成されてきた。同じインド・ヨーロッパ語族間でのことなので、英語にはそのまま、或いは音韻の関係で少し変えるだけの借用が多い。

以下、英国の歴史に従って、英国に入ってきた民族と言語について、現在の英語に借用された例を挙げつつ解説した。尚、英国の先住民ケルト族 (Celts) とケルト語 (Celtic) については英語とは別の言語として扱った。

・5世紀に現在のデンマーク、ドイツ、オランダあたりからアングロ (Angles)・サクソン (Saxons)・ジュート (Jutes) 族が英国に入り込んでケルト人を辺境に追いやり、さらに8世紀半ばから11世紀半ばにかけてスカンディナヴィアからのヴァイキング (Vikings) と、デンマークからのデー人 (Danes) が英国を攻めて定住した。

1. アングロ・サクソン語とスカンディナヴィア語→古期英語 (Old English)

・1066年、フランスのノルマン人 (Normans) の王 William が英国王 Harold を破って英国を占領した。

2. フランス語→中期英語 (Middle English)

・16-17世紀、対仏の百年戦争、王位継承をめぐる内戦の薔薇戦争などで遅れていたルネサンス (Renaissance 文芸復興) が英国にも到来した。→初期近代英語 (Early Modern English 現代の英語の原型)

3. ギリシア語

4. ラテン語

5. イタリア語

・さらに、1492年の新大陸(西インド諸島)発見以降アメリカに渡った英語に、先住民の言語の他に、ヨーロッパ諸国からの移民の言葉が持ち込まれた。

6. アメリカ先住民 (Native Americans, 24程の種族、約370の言語) の言葉

7. スペイン語

8. オランダ語

9. ドイツ語

・その他、以下の言語からの借用についても触れた。

10. アラビア語 ペルシア語 ヒンディー語  
ポルトガル語 ハワイ語

第2回 平成26年10月11日(土)

「英語の成り立ち(2) 語源学の視点から：借りる、造りかえる、誤解する…」

第2回目は、語形成である。

講義に先立って、前回受講生から質問があった英語のアルファベットの起源について解説し、その関係から言語の区分について触れた。祖語(共通基語 proto-language)は、下位の言語の分析によって推測され、語族(language family)の下位は語派(branch)となる。

英語はインド・ヨーロッパ語族(Indo-European languages)のゲルマン語派であり、同派に英語、ドイツ語、デンマーク語、などがある。

語形成の類型をおおまかに8つに分け、例を挙げて解説した。

1. 全く新しく作り出される場合(made-up word, coinage)
2. 接頭辞(prefix)、接尾辞(suffix)等、接辞(affix)をつけて作られる場合
3. 複合語(compound) - 単独でも用いられる語を二つ以上組み合わせて作られ、構成する個々の語の意味はわかっても、全体の意味は異なる場合  
一語に見えるが、起源は複合語という仮装複合語(disguised compound)もある。
4. 短縮(clipping)による場合。語の一部を切り取って新語を作る。
5. 頭文字をとる場合。短縮の一種であるが、頭文字をとってつなぎ合わせて作る。

個々のアルファベットを一つずつ発音する場合と、全体を一語のように発音する場合(頭文字 acronym)がある。

6. 混淆(blending)によるもの。二つ以上の語の一部分ずつが組合わさって一語となったもので、複合と短縮の組合せとも言える。

以下、多分に(誤解)に基づくもの

7. 異分析(metanalysis デンマークのイエスペルセンという言語学者が作った術語)によるもので、元来の分析とは異なったように分析されるもの
8. 通俗語源(folk etymology, popular etymology)

第3回、第4回：蘇 位静講師担当

第3回 平成26年11月1日(土)

「日本語を母国語としない児童・生徒と学校文化(1)」

1970年代以降に日本に来た外国人の特徴の一つとして長期化滞在があげられる。その結果、日本の公立小中学校に通っている外国人児童・生徒も増えてきている。この現状を踏まえ、日本語を母国語としない子どもたちが日本の学校に入ることによって、日本の学校、または自治体・政府にどのような変化をもたらし、どんな問題があり、どういう対策をしてきたのかについて講義を行った。

具体的に、まず、「ニューカマー」と「オールドカマー」に関して、在留外国人数、国籍など日本にいる外国人の人数や特徴を紹介した。それから、日本の学校文化の特徴はどんなものなのかを紹介し、外国人児童・生徒の

現状について話をした。続いて、彼らに関するさまざまな問題を述べ、それに対して、日本の学校や自治体、政府はどんな対策をしてきたかについて講義を行った。講義の合間に、具体的な事例や資料を見ながら、日本を母国語としない児童・生徒についての理解を深めていった。

※「ニューカマー」は1970年代以降来日した外国人のことを指す。

※「オールドカマー」は戦前・戦中に来日した人々。具体的に在日コリアンなど。

#### 第4回 平成26年12月13日(土)

「日本語を母国語としない児童・生徒と学校文化(2)」

第4回目の講座では、前回の日本語を母国語としない児童・生徒について引き続き、アメリカ・カリフォルニアのケースを中心に講義を進めた。前回で日本にいる日本語を母国語としない子どもたちの現状、問題、それから対策の話をも具体的な事例や資料を参照しながら進めた。

今回は、移民大国であるアメリカを例に、特に移民の受け入れの歴史が長く、移民対策への経験があるカリフォルニアを中心に、カリフォルニアの言語政策や英語を母国語としない子どもたちへの対策について話しをした。続いて、なぜ「文化」が教育や学習に影響を及ぼすのかを具体的な事例を交えながら講義を進めた。

最後に「Preschool in Three Cultures Revisited (Tobin, Wu & Davidon, 1989)」という研究を取り上げ、学校文化がいかに教師や子どもへの影響を与えるかを示し、2回

にわたって「日本語を母国語としない児童・生徒と学校文化」というテーマで進めてきた講座を締めくくった。

第5回、第6回：高橋 美和教授担当

第5回 平成27年1月17日(土)

「東南アジアへのインド文明の影響」

まず、受講者の方々に東南アジア10カ国の国名を白地図に書き込むというウォーミング・アップをしていただいた後、かつて東南アジアのほぼ全域に及んだインド文明の影響がどのようなものだったのか、今日どのように影響が残っているのかについて、大陸部東南アジアを中心に検討し、配布資料や画像・映像資料を用いつつ解説した。

#### 1. 東南アジア地域の現在…大きな文化的多様性

現在の東南アジアという地域的まとまりには、実は非常に大きな文化的多様性が包含される。①各国の主要宗教もしくは国教にいわゆる世界三大宗教（キリスト教・イスラーム・仏教）の全てが含まれており、東南アジアは単一宗教圏ではない。②東南アジア諸言語を言語学的に分類すると、少なくとも4つの語族が存在する。③10カ国中、国語・公用語の表記に固有文字を用いる国が4カ国ある。

#### 2. 東南アジア文化史の大まかな見取り図

文化変容には普通、①内部からの変革+②外来文化の影響、の両方が関わる。②は政治力・経済力で優る外部からの「同化圧力」と

いう側面と、受容側の「積極的受容」という側面とを有する。

東南アジアの文化史を大まかに捉えると以下ようになる。東南アジア各地に存在した基層文化を基盤に初期国家が成立したが、その後インド文明の影響を強く受けた時期にインド的王権を持つ王国が各地に誕生し、さらにその後、大陸部（の大部分）ではスリランカから伝播した上座仏教化が、島嶼部（の大部分）ではイスラーム化が進行し、植民地時代と独立・近代化を経て今日に至っている。

### 3. 「インド化 (Indianization) とは

4～6世紀に栄えたインドのグプタ朝でサンスクリット語に基づく古典的インド文明が成立し、インド各地、そして東南アジアにも広まった。

東南アジアでは5世紀頃からこの「インド化」が始まった。それ以前から、各地に古代王権が存在していたが、「インド化」により、古典インド文明（インド的な王権概念、ヒンドゥー教および大乘仏教の信仰、叙事詩や神話などの文学、古典インド法典、サンスクリット語、建築、彫刻、音楽、舞踊、天文学、暦、医学等の文化複合）の組織的受容を通して、インド的な古代国家が東南アジア各地に次々と誕生した。ただし、「組織的受容」とはいえ、インドのカースト制、ヴェーダ教理、食の禁忌などは受容されなかった。

これら古代国家の共通項として、ヒンドゥー／大乘仏教的世界観、サンスクリット語の碑文・国号・王名などがあげられる。世界遺産アンコールワットを例にとれば、この建造物の構造がインドの世界観における宇宙の中心であるメール山（須弥山）を表現して

いる。この時代、多神教であるヒンドゥー神像が多く作られた他、壁面彫刻にはシヴァ神と王の神聖性を同格とするデーヴァラージャ信仰が表現されている。大叙事詩「ラーマヤナ」の世界はアンコールワットの壁面彫刻にも見いだせる他、さまざまな場面が影絵芝居や古典舞踊劇として今日も上演されている。

かつて歴史学では、“インド文明受容を経て初めて東南アジアに王権が成立した”という見方が優勢だったが、最近の研究では、東南アジア諸地域の初期国家時代以降、地域基層文化に適合するような形で選択的に受容されたとされ、東南アジアの「インド化」は“外部からの押し付けではなく、インド文明の土着化の過程だ”というとらえ方が主流である。

### 4. 現在に息づくインド的な文化要素

現在の大陸部東南アジアでは、近年の南アジアからの移民によるものを除けばヒンドゥー教の体系的な信仰はもはや存在しない。しかし、かつての「インド化」は、①断片的に残存、②完全な土着化、③文化遺産として息づく、のいずれかとなっている。

①タイやカンボジアの王宮行事を司るバラモン師、ブラフマヤガネーシャのように単体として親しまれ信仰されるヒンドゥー神、インド式占星術など。

②古代インドのブラフミー文字を改良・発展させた文字（ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス4カ国の国語表記に使用）、食文化の一部、牛を用いた犁耕作、サンスクリット語起源の抽象語。

③には、国家の象徴となっている数々の歴

史的石造建築物や「ラーマーヤナ」にもとづいた舞踊劇、影絵芝居など。

#### まとめ

インド化以降様々な文化変容を経た東南アジアでは、体系だった宗教教義もしくは王権正統性の要としての「インド文明」はもはや存在しないが、各国の国民統合・歴史の象徴として現在も大きな意味を持っている。

第6回 平成27年1月31日（土）

#### 「カンボジア社会に定着した外来文化」

我々は普段「〇〇文化」のように「国名＋文化」という言い方をよくするが、現代の日本人の生活を振り返ってみると、実に多くの外来語や外来物を取り込んでおり、日本古来のものは数えるほどである。この第6回では、こうした“文化は常にハイブリッド”であること、それにもかかわらず「〇〇文化」と呼ばれる国民文化が成り立つのはなぜなのかを、カンボジアを例として取り上げ、画像資料や配布資料を用いつつ、論じた。

#### 1. カンボジア史概観

カンボジアの主要民族であるクメール人は大陸部東南アジアの先住民族の一つであり、扶南、真臘といった初期国家が知られる。5世紀頃から「インド化」時代を迎え、9世紀に成立したアンコールはヒンドゥー教的王権概念に基づく王国であった。（「インド化」時代については第5回で解説。）13世紀頃から、ヒンドゥー教に替わって上座仏教（今日のカンボジアの国教）が浸透する。アンコール崩壊後、ポスト・アンコール時代を迎えた

が、しだいに東からベトナム、西からはタイの政治的浸食を受けるようになり、文化史的にはタイの影響を強く受けた。19世紀半ばにフランスの保護領となった後の植民地時代には、フランス統治下の文化行政の影響を強く受けた。1953年に独立、1970年前後から20年余の内戦時代を経て、1993年に新生カンボジア王国として再出発した。

#### 2. カンボジアの民族的状況

カンボジア国民を構成する主要民族はクメール民族（人）である。言語的には、2008年センサスの母語統計によればクメール語（＝カンボジア語）を母語とする人々は人口の96%を占める。

一般に少数民族には先住民族型と移民型とがあるが、カンボジアでは、前者には古代王国チャンパーの末裔とされるムスリムのチャーム人、そして山岳地帯に居住する山岳民族諸集団（20以上）である。後者の代表は華人（系住民）である。その他、国境を接するため、ベトナム系、タイ系、ラオス系住民も存在する。

#### 3. 外来文化由来の生活文化

通常、少数民族が多数派民族に対して持つ文化的影響力は小さいが、政治力・経済力に優れば影響力を持つこともある。カンボジアの場合、タイ・フランス・中国（華南）からの文化的影響力がこれにあてはまる。

タイ…ポスト・アンコール時代の政治的影響力のため、タイ語およびタイ語に入ったサンスクリット語彙がクメール語に入ってきた。アンコール時代にタイ語に借用された古クメール語が逆輸入される例もあった。言語

だけでなく、カンボジア王族のタイ寺院での一時出家慣行から宗教面での影響があり、また現在“伝統舞踊”とされるクメール舞踊もタイ古典舞踊から大きな影響を受けている。

フランス…植民地時代にフランス語の語彙、行政組織、建築様式、食文化などで影響を受けた。現在学校教育での第一外国語が英語であるためフランス語を解する人口はごくわずかであるが、フランス語起源の語彙は科学分野の述語だけでなく日常語彙の一部として定着した。

中国…カンボジアは中国の政治的支配を直接受けた時代はないが、中国南部（特に広東省潮州）からの移民の経済力による影響を受けたと言える。現在華人のカンボジアへの同化度は高く、言語も宗教もクメール人と同一であるが、同時に華人文化の伝統も根強く、春節を含む華南伝統の節句の祝い、漢字表記の店舗看板や墓石、華語にもとづく親族呼称の使用、などが見られる。都市部の華人の多くが自営業者であるため、商業用語の一部がクメール語に取り入れられた。外食文化への影響も強い。

#### 4. 国語の整備プロセスに見る「外来」と「クメール」のせめぎ合い

仏植民地時代の後半、フランス語を教授言語とするエリート教育とクメール語を教授言語とする一般向けの教育の複線型教育が実施されるに伴い、主要民族の民族語であるクメール語を国語とするための積極的な言語政策が必要になった。国語整備には、①正書法（綴り字）の整備、と②クメール語の近代語彙の整備の2つを必要とした。笹川（2012）※によると、1920年代に辞書編纂委員会が①

の検討を始めたが、「語源型」と「音韻型」との対立があった。（結局「語源型」を採用。）この「語源」とはインド古典語のサンスクリット語（S）およびパーリ語（P）を指す。

一方、1940年代以降、文化委員会がフランスからの借用語を置き換えてクメール語の近代語彙の造語を進めた。S、P、S+P、もしくはクメール語とS/Pとの合成などにより新造語を増やした。後半はSよりもPの活用が増加した。

一方、音節が長く難解な語になる傾向があるSやP活用ではなく、もともと短音節のクメール語語彙に接中辞を用いて新語彙を造る方法を積極的に導入する「ケマラジナカム（＝クメール語化）」を主張する人々が現れ、1970年代以降は主流となった。しかし、接中辞による造語には限界があり、分野によってはパーリ語やフランス語起源の語彙の導入もやはり必要であった。

#### まとめ

外来文化の定着には、①“便利”“快適”なために多くの人々に好まれて定着、②政治権力による押しつけで定着、③能動的受容によって消化吸收した結果の定着、といういくつかの道筋があると考えられる。外来文化に対抗する「自文化」の主張にも、実際には、元をたどれば外来であった文化の助けを借りることがある。特に、カンボジアの新造語作成過程にみられたパーリ語の活用がそれにあたる。「〇〇文化」という名の国民文化の成立には、外来文化を受け入れつつ、国民文化を成立させようとする内部的な営為があって初めて成り立つものと言える。



※笹川秀夫 2012「20世紀カンボジアにおける言語政策－正書法と新造語をめぐる議論を中心として－」『アジア太平洋討究』18：143－166

第7回、第8回：鈴木 邦武教授担当

第7回 平成27年3月7日（土）

「フランシスコ・ザビエルの来日とキリスト教の伝播」

1) まずザビエルが生きた頃のヨーロッパの歴史を概観した。当時ヨーロッパは必ずしも平穏ではなく、宗教上では従来のカトリックに対抗するプロテスタントの登場とイギリスにおけるイングランド教会の成立、ジュネーブにおけるカルヴィンによる宗教改革などがあり、政治的にはドイツとフランスの間にイタリアを巡る戦争が起こり、ウィーンがトルコ軍に包囲されるというようなこともあり、ユグノー戦争、オランダの独立戦争等、少し下っては30年戦争なども起こってくる。

2) ついで、ザビエルの日本に来るまでの生涯の足取を辿った。ザビエルはパリの大学に入るが、そこでイグナティウス・デ・ロヨラに出会い、決定的な影響を受け宗教家の道を歩み出すことになる。そしてカトリック教会の刷新と勢力回復を目指し、デ・ロヨラと共にイエズス会を結成し、カトリック教会の建て直しに尽力する。

3) イエズス会の活動の一環としてポルトガル領となっていたインドでの宣教の任を負ってインドに向かう。そこで活動中に彼は日本人に出会い、初めて日本という国の存在を知り、日本に宣教に行くことを考え始める。

4) ザビエルが知り合った日本人はヤジロウと言って鹿児島に生まれた侍であった。ヤジロウは殺人を犯して仏教の寺に保護を求め、そこから知人のポルトガル人の船で亡命をしていたのであった。ザビエルはヤジロウを自分のもとにひきとどめていて、このヤジロウを案内人にして日本に向かった。

5) ヤジロウが鹿児島出身であったため、ザビエルは鹿児島の港に入る。それは1549年8月15日であった。鹿児島のザビエル公園にはそのときの記念碑が建立されている。

最初の数日を武家の町にあったヤジロウの家で過ごした。鹿児島でのザビエルたちに対する民衆の態度は温かく礼儀正しかった。ヤジロウの母や親戚の者が信仰を受け入れた。

6) その後ザビエルは大名との接見を求め、島津貴久の本城を訪れた。島津貴久は好意的に対応し、ザビエルの申し出を快く承諾し、時期が来たら都にゆくための船を準備することを約束し、鹿児島に滞在する間の宿泊所も提供した。しかし、貴久は、僧侶たちと有力な家臣たちの圧力に負け、ザビエルたちへの協力は出来なくなる。

7) 1550年9月、平戸に着き、次いで山口に行き、大名大友義隆と会う。岩国から海路、瀬戸内海を通過して堺に行き、そこから京都に向かう。しかし、当時の京都は戦乱が残した廃墟ばかりで、また、後奈良天皇は権力がなく、荒廃した都で説教する許可を得たり、ザビエルが大学と思っていた比叡山を訪れることも無理だということが明らかになった。京都を去り、堺から平戸に向かう。

8) 1551年、再度山口行き、もう一度大内義隆に謁見している。山口に滞在して4ヶ月が経過した頃、府内（大分）の大名大友義鎮

からの誘いがあり、そこに向かう。大友義鎮はキリスト教に帰依し、その布教を保護するとともにポルトガル船と貿易を行い、1582年同じ九州の大名大村純忠や有馬晴信ら共にわが国最初の遣欧使節をローマ教皇のもとに派遣している。

9) 1551年11月大友義鎮のもとをさり、ゴアに向かう、1552年2月、ゴアに到着、直ちに中国での布教の準備に取り掛かる。4月に中国に向かって出帆、広東沖の上川（シャンチョワン）島から広東に入ろうとしたが、果たせず12月3日そこで病死。

10) 以上ザビエルの生涯を辿った後、ザビエルに続いて来日し、日本をヨーロッパに紹介した宣教師ルイス・フロイスについても触れ、ザビエル来日後のキリシタン関係状況を概観した。

## 第8回 平成27年3月14日(土)

「オランダ商館付の2人の医師、ケンペルとシーボルトについて」

### 1. ケンペルについて

1) 生い立ちとスウェーデン王に仕えるまでの紹介。

2) ケンペルは、スウェーデン王が派遣したロシア並びにペルシアへの外交使節の一員となって1683年3月スウェーデンを立ち、1684年3月ペルシアの首都イスファハンに到着。皇帝との謁見まで何ヶ月も待たされ、更にスウェーデン王の親書への返事は何年も待たされることになる。「知りたがり病」と自分のことを呼んだほどであったケンペルは非常に好奇心が強く、また、自分が見聞したことを事細かくメモする習慣があった。彼は待機さ

せられている間にペルシアの状況を好奇心を持って見聞するが、やがて更に遠い異国のことを知りたいという欲求にかられ、安定した随員の地位を捨てて、オランダ東インド会社に勤務する。そして会社の拠点が置かれていたホルムズ湾岸の町バンダール・アッパースに移り、1688年6月、インドに向かい、更にアジアにおける東インド会社の本拠地があるバタヴィア（インドネシアのジャカルタ）に行く。ここで医師の仕事に従事していた彼は、やがて会社から長崎の商館の医師として日本に派遣されることになる。

3) ケンペルは1690年5月バタヴィアを出発し、同年9月25日日本の地を踏んだ。1691年3月、江戸参府、將軍徳川綱吉に拝謁。

オランダ商館長は、その義務として、毎年1度、長崎から江戸に出向かなければならなかった。若干の随員を伴って江戸に赴き、將軍に拝謁して貿易許可の礼を述べ、献上品を呈するのが年中行事となっていた。ケンペルは日本滞在中2度この江戸参府に随行しているが、そのことが彼の日本研究に大いに役立っている。

4) 商館長の江戸参府は、將軍の前に商館長カピタンがほんの少しだけ姿を見せて終わりになるのが常であったが、5代將軍綱吉の代には、それに続いて非公式の謁見がカピタンの随員も含めて行われるようになっていた。將軍は御簾の陰から御台所や大奥の女たちと共にこの珍しい訪問者を眺めた。外国人はコートや、時にはかつらまでとって見せなければならなかった。將軍は、彼らに行進したり、飛び跳ねたり、お互いにケンカさせたり仲直りさせてみたり、オランダ語を書いたり話したり、そしてさらに踊ったり歌を歌った

りするように命じた。

5) 1692年3月2度目の江戸参府を終わった後ケンペルは5月に長崎に戻り、10月バタヴィアに向けて長崎港を出帆、1694年2月バタヴィアを立ち、10月アムステルダムに帰着。

6) 1712年レムゴーで『廻国奇観』を出版。ケンペルはこの他に、彼がアジアで見聞した事柄を整理して著書に著わして出版する予定であった。また、その完成が当時のヨーロッパの知識人に待ち望まれてもいた。しかしそれは実現しなかった。

7) 彼が遺した原稿の一部はイギリスの収集家スローン卿がケンペルの遺族から買い取り、それを秘書のスイス生れのショイヒツアーに英訳させ『日本誌』としてロンドンで出版した。この著書は、2年後にオランダ語とフランス語に訳されて版を重ね、ヨーロッパの日本観を決定づける名著となった。

## 2. シーボルトについて

1) ドイツのヴェルツブルクに生まれ、その地の大学で医学を修め、卒業後一時開業したが、間もなくオランダの外科軍人となりジャワに赴任した。1822年オランダ東インド会社に入り、次いで長崎出島商館の医師を命じられ、同時に日本の自然及び人文科学上の研究の任務も受けて1823年長崎に来る。

2) 着任後、日本人患者の治療と医学教育を始めたが、その名声はたちまち広まり全国から多くの学徒が集まった。1824年、長崎市外鳴滝に日本人門弟の名義で診療所兼学塾を設け、西洋医学及び一般科学の教授を行い、日本で初めての臨床講義も行った。

3) 1826年商館長の江戸参府に随行し、そ

の際、宇田川榕菴を初め、多くの日本人学徒と接した。彼はこうした機会を利用し、また全国から集まった門人を通じて、日本の歴史、地理、民俗など各方面の資料を集め、日本の科学的研究にも従事した。

4) こうして日本に滞在5年後帰国しようとしたとき、その荷物中に日本地図など持ち出しを禁止されていたものが発見され、いわゆるシーボルト事件が起こった。この事件で関係者は逮捕、処罰され、シーボルトは出発を禁止され、約1年間出島に軟禁されて長崎奉行の審問を受け、国外追放再渡航禁止を言い渡され、1829年長崎を去った。

5) 帰国後シーボルトは収集した膨大な資料を整理し、日本に関する著書を出版し、ヨーロッパにおける日本研究の第一人者となった。彼は日本の植物の研究にも力を入れ、その成果をヨーロッパ各地の園芸のために提供することにも努めた。

1845年7月ヘレーネ・フォン・ガーゲルンとベルリンで結婚。

6) 1858年日本とオランダの間に通商条約が結ばれ、彼の入国禁止も解けたので、翌年オランダ商事会社の顧問として再び日本に来、その際彼の日本での妻其扇（ソノギ、楠本滝）や娘楠本いねとも再会、1862年に帰国した。

7) 著書としては大著『日本』をはじめ『ファウナ・ヤポニカ（日本動物誌）』、『フロラ・ヤポニカ（日本植物誌）』などがあり、これらがヨーロッパにおける日本理解のために貢献したことを紹介した。